

(言語活動)

確かな学力を支える言語能力の育成
～ICT機器を活用した各教科における言語活動を通して～

大阪市立南港桜小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由と研究の趣旨

言語活動の充実とは、各教科等で行われる知的活動の基盤であり、コミュニケーションや感性・情緒の基盤である。確かな学力の基盤となる言語能力を育成し、習得、活用、探究の授業に生かすことで学力の向上を図り、児童に「生きる力」を育むことが重要である。

本校においては、全国学力・学習状況調査などの結果から基礎学力の定着やそれらの知識を活用し自分の考えを説明したり表現したりする力の育成が課題となっている。そのため一昨年度は研究主題を「国語に親しみ、学び合う児童を育てるための指導法の研究～『読むこと』を通じて基礎・基本の定着をめざして～」とし、国語科の授業において児童の言語能力の育成を図るための効果的な指導方法の工夫を追求した。その結果、音読を中心に学習を進めることで国語好きの児童が増え、意欲的に読書をする児童も増えてきた。

そこで、昨年度より本校では「確かな学力を支える言語能力の育成」～ICT機器を活用した各教科における言語活動を通して～を研究主題として、国語科で培った研究をさらに継続・発展させ、各教科・領域等における「言語活動の充実」や「確かな学力を支える言語能力」の充実を目指し、指導の日常化、習慣化を図ってきた。また、国語科での研究を意識した「言語環境や言語活動の質的な充実」を追求し、授業実践を展開してきた。そうすることにより、本校の課題である基礎学力の定着や言語を活用する力の向上につながり、確かな学力を支える言語能力の育成を図ることができると考えたからである。2年目にあたる本年は、協働的な学びの充実のため、昨年度の研究に加え、話型の提示の工夫や活用の仕方。話し方や聞き方といった基礎基本の徹底に重点をおいた研究を進めてきた。また、指導にあたっては日常的にICT機器を活用することで、児童の学習意欲を高め、容易に学習内容を理解する環境を整えることによって、本研究主題にせまってきた。

2. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 主体的・対話的な深い学びによる協働的な学びの充実

- 主体的、対話的な深い学びによる協働的な学び（ペア学習、グループ討議、学びあいの場）により、問題解決を図る。
- いずれの教科においても、ノート指導や板書の工夫をし、記録、要約、説明等の言語活動を充実させる。
- 学習スキルの育成と学習ルールの確立。

視点② ICT機器を活用し思考力、判断力、表現力等をはぐくむための学習活動の推進

- ICT機器や思考ツールの活用により、学習活動を深める。
- ICTの効果的な活用の工夫。

視点③ 言語活動に生きてはたらく評価のあり方

- 学びの深まりに対する確かな評価の実施（思考や判断・行動）

- 児童自身による多様な評価のあり方を考える。

3. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

視点① 主体的・対話的な深い学びによる協働的な学びの充実

低学年ではペアやグループでの活動を多くすることで、友だちとの交流を通して意見を伝え合い、目的意識をもつことができたり、考えを深めたりすることができた。普段の学習から聞くこと話すことの学習スキルを提示し指導したことで、児童の主体的・対話的に学ぶ力を身につけることができた。高学年ではアンケートの活用や調べ学習、プレゼンテーションの作成など児童が意欲をもって学習を進めるための工夫をすることによって、グループ内や他のグループとの意見交換やアドバイスが活発になり、互いに学び合う力を付けることができた。

視点② ICT機器を活用し思考力、判断力、表現力等をはぐくむための学習活動の推進

グループやペア学習の時に、タブレット端末や大型ディスプレイを使い、写真や動画を見せながら学習を進めていく上で、伝えたいことが視覚的に捉えられ、意見交流を活発に行うことができた。文章表現が未熟な低学年児童にとって、言葉だけでは伝わりにくいことも視覚的に伝えられて効果的だった。また、体育学習では、ひとりひとりの動きをチェックしたりアドバイスしたりすることが児童間で自然に行われ、技術の習得に大いに役に立った。高学年では資料作りや提示を短時間で行うことができるようになり、効率よく学習を進めることができた。

視点③ 言語活動に生きてはたらく評価のあり方

低学年では、学習シートや学習カード、振り返りシートなどを使い、学年に応じて◎や○、△などの記号や文章を使って自己評価を行うことで、児童の意欲や思考、気付きを評価するのに有効的であった。また、他のグループの作品を見て、意見を交換しながら良いところを発表し、自分たちの作品に取り入れる活動も効果的であった。また、ループリック評価では、授業のはじめに確認することで、児童が学習の中での目標や見通しを持つことができ、目標を達成する喜びを味わわせることができた。

(2) 今後の課題

視点① 主体的・対話的な深い学びによる協働的な学びの充実

学習場面における話型の提示の仕方や活用方法などのさらなる工夫。グループでの意見交換の場をもう少し増やす。友だちと友だちとの意見をつなぐ発言を考えていけるようにしたい。また、話す・聞くスキルのさらなる定着を図りたい。

視点② ICT機器を活用し思考力、判断力、表現力等をはぐくむための学習活動の推進

指導していく側にとって、教科、領域の学習内容によりどの場面でどんな風に ICT 機器を活用していくかを考え、効果的に活用していけるように研究を続けていくことや ICT 機器の扱いに慣れていない児童もいるので、全員がスムーズに扱えるよう、ICT 機器に触れる機会をさらに増やしていくことも考えていきたい。

視点③ 言語活動に生きてはたらく評価のあり方

自己評価については、児童に明確な視点を伝えていくことの大切である。学年のもっている力にあわせて、従来の自己評価だけでなく、ループリックやパフォーマンス評価など多様な評価のあり方を今年度に引き続き研究していき、児童がお互いを評価する力をさらに高めていく必要がある。